わが街“蕨”…住み慣れて４０年…

藁火の一閑人　南山翠春
（井　出　昭　一）

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元日の朝晴れて風無し。

元日の朝、目覚めたときに快晴無風なら、必ず思い浮かぶのがこの啄木の歌です。今年の元旦はまさにこの通りでした。

６時半に起床。定例となっている真向法体操で身体をほぐした後、抹茶を自服で一服。頭が爽快になったところで、いつもならパソコンに向かうのですが、それを後回しにして、わが街“蕨の名所巡り”をすることにしました。

蕨市は、江戸と地方をつなぐ五街道のひとつ「中山道」の宿場として栄えたところです。中山道は江戸・日本橋を起点とする６９宿ですが、最初の宿は板橋宿で、戸田の渡しを過ぎた第二番目が蕨宿です。

現在の蕨市は、面積わずか５．１０平方キロの日本最小の市で、昨年、市制施行５０周年を迎えました。私の住まいは“蕨市中央”で、旧中山道と市役所通りの交差点の一角にあります。

初日が昇りかけた７時に家を出ました。旧中山道に面している蕨本陣跡と蕨市立歴史民族資料館から、浦和・大宮方面に１００メートルほど先を右に折れて進むと三学院です。正式には金亀山極楽寺三学院と称する京都の智積院を本山とする新義真言宗智山派の

大きな寺院ですが、街では三学院で通っています。本堂は鉄筋コンクリート造で堂々たる姿ですが随所に細やかな装飾が施されています。数年前に木造の三重塔が建てられたのに続き、昨年夏には木肌の美しい阿弥陀堂が完成しました。このほか境内には、法隆寺の夢殿を模した八角の舎利殿、鐘楼、閻魔堂、平和観音像なども立ち並び、市内では最も見どころの多い名刹です。

三学院　舎利殿

三学院　平和観音像

初日の出を浴びて輝く三学院の堂宇を後にして山門を左に進み、蕨市立病院の前を過ぎた突当りが和楽備神社です。街の名前の「蕨神社」でもなく、地名の起源ともいわれる「藁火神社」とも名付けけないで、“和”と“楽”が備わった神社としたところが面白いと思っています。漏電で焼失した社殿は、数年前に再建さればかりでまだ新しさが残っています。除夜の鐘のあと初詣の波がどっと押し寄せる明治神宮などとは違って、８時近くになって、ようやく晴れ着姿の人が集まり始めていました。

和楽備神社　本殿

和楽備神社　本殿正面

和楽備神社の東側が蕨城址公園ですが、城址と云っても城の面影はほとんどなく、漢学者の諸橋轍次の書になる蕨城址の碑が木立の中に建てられているだけです。公園の東側には、成年式発祥の地記

蕨城址公園

成年式発祥の地記念像

念像が建てられています。蕨市は日本全国で初めて成人式を開催した町なのです。敗戦で意気消沈していた若者を励ますために、昭和２１年１１月、当時の蕨町の青年団が全国に先駆けて「成年式」を開催しました。「成人の日」が国民の祝日として制定されたのは、昭和２３年のことです。蕨市では今でも「成人式」とせず「成年式」という名のもとに２０歳の若者を祝福しています。

この記念像のすぐ横に「青春の碑」があります。高さ１.５メートルほどの御影石に、サミュエル・ウルマンの散文詩 “ＹＯＵＴＨ” 「青春」が英語の原文と日本語訳が細かい字で刻まれています。この詩はＧＨＱの最高司令官マッカーサー元帥が好んで口ずさんだことが知られています。日本では、東洋紡会長の宇野収氏が昭和５７年７月、日本経済新聞のコラムで「青春の詩」を紹介したことが契機となって急速に広まりました。今でも年齢を問わず多くの人々に勇気と希望を与えて続けています。日本語訳はいくつか紹介されていますが「青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。」で始まる最も知られている邦訳をしたのは蕨出身の岡田義夫で、その生家はわが家の数軒先のところです。わが家から京浜東北線の蕨駅に行くには１０数分かかりますが、蕨市民会館の北側の城址公園を横切って、青春の碑の前を通って行くのが最短の経路です。したがって、「青春」は朝な夕なに見続けてきた碑なのです。

青春の碑

蕨城址公園から西に向かって市役所前の細い道の先が旧中山道で、立歴史民俗資料館と蕨本陣跡に戻ります。スタートしてからおよそ６０分で蕨市の主な名所を回ったことになります。それほど小さな街がわが蕨市です。

蕨本陣跡

しかし、小さいがゆえに便利なこともあります。市役所、郵便局、警察署、市立病院、市民会館、歴史民俗資料館など蕨市の主要施設はすべて徒歩１０分以内のところに集中し、さらに大型スーパー（イトーヨーカ堂）、コンビニ（セブンイレブン）、温泉（やまとの湯）も徒歩５分以内です。

小さい蕨の街中を歩くだけでは運動不足になりますので、「古今建物集…美しい建物を訪ねて…」の材料集めを兼ねて、私は街を飛び出して都内の建物散策（？）をしているわけです。住み慣れて４０年、便利過ぎる小さな街、これが

わが街“蕨”です。

人は信念と共に若く　疑惑と共に老ゆる。
人は自信と共に若く　恐怖と共に老ゆる。
希望ある限り若く　　失望と共に老い朽ちる。
（原作：サミュエル・ウルマン　邦訳：岡田義夫）

以上